



KANSAI
UNIVERSITY



CTL Kansai University Center for Teaching and Learning Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2014

vol. 16



大学教育の重要性

教育推進部副部長／社会学部 教授 片桐 新自



今や、大学は、日本の教育システムの中では、小学校教育とともに、人間力を伸ばすことができる非常に重要な教育の場になっています。特に、関西大学に入学していくような学生たちにとって、中学と高校は志望大学に合格するという目標を忘れては過ごすことのできない場となっており、もしも教師が人間力を伸ばしたいと思っても、多くの生徒たちはそんな能力は受験には関係ないと考え、関心をなかなか示してはくれないものです。

しかし、大学に入ると、その先にあるのは、就職、そして社会人として生きていくことです。厳しい就職戦線に勝ち抜き、人生をたくましく生きぬいていくためには、高い人間力が必要ですが、この人間力は、これまでの受験勉強のような、傾向と対策を知れば伸ばせるというものではありません。求められるのは、まさに総合力です。この総合力=人間力を伸ばす上で、大学教育が非常に重要なのです。

教養や論理的思考力はもちろんですが、企業（だけでなく社会）でもっとも求められるコミュニケーション能力も、プレゼンテーション能力も、問題発見能力も、自己や他者を的確に把握する能力も、大学教育の中で鍛えることができます。教える側の大学教師がこうした能力を伸ばすことを自覚的に意識し

試みれば、学生たちの人間力は確実に伸びていきます。

そのための方法はといえば、当たり前かもしれません、本人のやる気をいかに引き出すかということになります。学生を一律に叱咤激励しているだけでは効果はほとんどありません。一人一人の学生のパーソナリティと能力を的確につかみ、それぞれの学生に応じた指導を丁寧にしていかなければなりません。時間も気も違う大変な仕事ですが、実際に学生たちの人間力が伸びたことを実感できた時の喜びはこの上ないです。

こうした丁寧な指導は、ゼミなど少人数で運営される授業でより効果を發揮することは間違いないですが、最近はICT教育が進み、講義科目でも、かなり双方向的な授業が可能になっています。また、こうした新しい技術を駆使しなくとも、現在の学生たちの知識がどの程度のものなのか、どういうことには関心を持ちそうなるべく正確につかみ、適切な刺激を与えるなら、講義科目でも学生たちを成長させることはできます。

いろいろ書いてきましたが、最後に、学生を伸ばすことを楽しめる大学教師が多ければ多い程、その大学の教育は大きな効果をもたらすものである、と指摘してこの小文を終えたいと思います。

フォーラム・セミナー報告

第11回 FDフォーラムを開催しました

9月6日、関西大学千里山キャンパスにおいて、第11回関西大学FDフォーラムを開催しました。今回のフォーラムは「大学教育再生加速プログラム(AP)」が採択されたことに鑑み、アクティブ・ラーニングの質を高めながら裾野を広げていくためにはどうしたらよいのか、アクティブ・ラーニングの成果をどのように可視化すればよいか、生涯に亘って能動的な学習者(Lifelong Active Learner)を育むためにどのような工夫や仕掛けが有効であるか、この三点をテーマに、神戸大学より近田政博氏、立命館大学より沖裕貴氏をお招きし、本学からは研究員の田上正範氏が登壇して、それぞれに貴重な知見やアイデアを開陳して頂きました。プログラムは近田・沖・田上の三氏による基調講演、同じく三氏によるパネルディスカッションの二部構成で進みました。

近田氏は「大学教職員にとってのアクティブ・ラーニング」というタイトルで鋭く先陣を切りました。アクティブ・ラーニングというと、もとすれば学生の学習態度や意欲あるいは手法にばかりにスポットライトが当たるるきらいがある、すなわち教師はアクティブ・ラーニングの機会を提供しているのに学生は少しもアクティブにならない、それは学生の側に問題があるのだ、もしくはアクティブ・ラーニングという手法には限界があるということだ、そのように捉えられがちだが、果たしてそうなのだろうかと、鮮明に課題が提示されました。氏は大学生がアクティブ・ラーニングを好まないのはそれまでの「そつなく知識を吸収する学習」の習慣が身についているため、そこに求められた出口の見える忍耐、手続きなどの馴染みのある事柄とは無縁の新たな学習形態に対して心理的な抵抗を持つてしまうからで

あると喝破し、これを克服するためにはアクティブ・ラーニングの意義が学生に伝わるように教職員自らがアクティブな姿勢や態度を示し、共に学習を楽しむばかりか、情熱や感動を確かに伝えることが不可欠であると、刺激的なご提案を頂きました。

沖氏は何故アクティブ・ラーニングには特別な成果指標が求められるのか、求められている割には確たる指標が作られない理由は何か、そのような停滞した状況を克服するためにはどうしたらよいのかについて、海外での取り組み事例、そしてご自身の実践例を盛り込みながら、実に示唆に富むお話をしてくださいました。一般に、授業科目の成果は「知識・理解」あるいは「技能・表現」など、比較的測定が可能な到達度によって測定されるが、その科目においてPBLなどの手法が用いられた場合、あるいは手法の用不を問わずアクティブ・ラーニングの展開を目指す授業が実践された場合、「知識・理解」や「技能・表現」とは別に「関心・意欲」「態度」「思考・判断」などの評価が求めされることになる、これらGeneric skillsは測定が困難な達成目標、あるいは向上目標であるため、アクティブ・ラーニングの成果指標はまだその確立を見ていません、まずはそのように我が国における現況の説明をされました。その上でこの克服を試みる海外の事例をいくつか紹介したのち、「真正な評価」を実施するためにはポートフォリオとパフォーマンスへの着眼・活用が不可欠であり、これを可能にするのがループリックであると、ご自身の実践例を引き合いに出されながら、混迷している多くの大学教員にとって希望を感じられる活路をお示し下さいました。

田上氏は「ジェネリックスキルを培う新しいアクティブ・ラーニング」という演目で、新しいアクティブ・

日時：9月6日(土)13:00～17:30
場所：第2学舎2号館 C304教室



FDフォーラムの様子

ラーニングの地平を開き、これを豊かにしていく「ハーバード流交渉学」の可能性についてご紹介いただきました。交渉学とは契約を成立させるためのスキルやナレッジを提供するものではなく、複数の当事者間の利害などを巡る衝突あるいは対立を克服するプロセスの実例を分析し、理論パターンを抽出した実践的方法論であり、この学問によって交渉を設計するための分析力、交渉を効果的に展開するためのコミュニケーション力、交渉の大詰めに必要な意思決定力が涵養されるとの解説は、ここに提供される実践的な学習プログラムがジェネリックスキルを培うのにきわめて有効なものであると確信させられるものでした。氏は交渉学の意義や価値についてお話をされるだけでなく、オーディエンスにそのイメージを伝えるために、ロールシミュレーションを柱とした有職者と学生による「交渉学ワークショップ」(本年5月10日実施)の様子を紹介したり、講演の中で交渉学のエッセンスを少しきり込んだシーンを再現したりするなど、豊かなコミュニケーション力の片鱗もお示し下さいました。

このように益ある講演ののちの第二部のパネルディスカッションは当然のことながら大いに盛り上がり、オーディエンスの方々からも好評価を頂きました。なお、講演会ならびにパネルディスカッションについては動画の配信を検討中です。

(教育推進部／教育開発支援副センター長 三浦真琴)

日常的FD懇話会を開催しました

7月24日、第8回日常的FD懇話会「反転授業の理念と実際」を開催しました。近年、高等教育でも注目されている「反転授業」について、ご紹介いたします。

●反転授業とは

20世紀後半にアメリカで生まれ、草の根で広まった反転授業は、説明中心の講義などをeラーニング化することで学習者に事前学習を促し、対面授業では理解の促進や定着を図る演習課題、または発展的な学習内容を扱う授業形態です。近年では、MOOC(Massive Open Online Courses、大規模公開オンライン講座)と結びついて新たな教育改革のキーワードとなりました。草の根で広まったその理由の1つは、反転授業を通じて、学習者の理解が格段と高まった事例がいくつか報告されたことがあります(Bergmann & Sams 2012, Fulton 2012, Khan 2012)。

●アクティブ・ラーニングと反転授業

反転授業は、一見、革新的な教育デザインのように見えますが実はそうではありません。他の教育方法と同様、授業担当者が実践の中で試行錯誤しながら少しづつ改善を繰り返してきた歴史があります。教育工学では、eラーニングと対面

授業を組み合わせたブレンド型学習の一形態として位置づけられていますが、その一方で、講義動画以外の教材を活用し、事前学習を促すことで対面授業のアクティブ・ラーニングを活性化する教育方法もすでにいくつか存在しています。事実、効果が上がっている反転授業では、対面授業において学習者同士の学び合いや教え合いを基盤とするグループワークを導入するデザインがほとんどであり、そこで見られる学習者の活動は、まさにアクティブ・ラーニングのそれと同様のものです。つまり反転授業の高い成果には、アクティブ・ラーニングにおける効果も大きく含まれているといえます。

●反転授業の種類と実践

今現在の反転授業には、アクティブ・ラーニングを含むデザインが大きく分けて2つあります。

1つ目は「完全習得学習型」と言われている方法で、ある教育内容のレベルを受講者全員が達成することを目標に掲げ、事前学習の内容を対面授業のアクティブ・ラーニングで定着・発展させる方法です。2つ目のデザインは「高次能力育成型」です。1つ目の「完全習得学習型」では、事前学習の内容を、対面授業において繰り返し考えることで定着させることを達成目標に置かれてい

日時：7月24日(木)14:40～15:40
場所：第2学舎1号館 共通会議室

るが、「高次能力育成型」は、事前学習で得た知識を活用し、対面授業ではさらに発展的な活動を行ふことを目的としています。その基盤となる知識や共通認識の構築については、その部分を動画化し、事前学習とすることで、対面授業でのアクティブ・ラーニングに多く時間が割けるという魅力があります。

●アクティブ・ラーニングを再考する

知識基盤社会の現代では求められる能力や知識のあり方も大きく変容しつつあります。固定された知識を早く正確に再生産するよりも、時代の変化に対応しつつ、自らの既存知識を新しい情報を結び付けて新たに再構築していく能力が求められるようになりました。個人の產物である「わかったつもり」を、他者との相互作用の中での搖らぎや躊躇を通じて、再度、自らの「わかった」を再構築していくプロセスは、まさに生涯学習にも通じる普遍的な学習モデルです。大学教育という大きなフレームの中で、反転授業を通じて現代に適した「学び方を学ぶ」ことは、学生にとっても大きなメリットがあります。反転授業で新たなに注目されたアクティブ・ラーニングにおける知識の重要性は、今後、ますます大きくなることでしょう。

(教育推進部 森朋子)

グローバルなアクティブ・ラーニングの取り組み

台湾の南投市にあるNational Chi Nan University (NCNU)で、第38回APAN2014(8/11~15)がおこなわれました。APANはICTを活用した教育分野の国際学会で世界中32カ国から287名の教育関係者が集い、最先端の研究進捗、成果を共有し合う学会です。日本の各大学からも50名程度の参加がありました。

この学会の運営スタッフとして、地元の大学生、アメリカ・カナダ等の大学や高校に留学中の台湾人学生、ベトナムからの大学生、アフリカ(ガンビア)からの大学生、フィリピンからの大学生、本学からの大学生5名を含めた総勢49名が集まりました。学会準備のため学生たちは8月6日から現地入りしました。本学からの参加学生は、池澤智也(政策創造学部4年)、大谷智美(社会学部4年)、藤江悠一(理工学研究科M1)、松田昇子(政策創造学部2年)、岡本康晃(化学生命工学部2年)で、2014年8月6日から16日まで、学会運営

のスタッフとしてインターンシップをおこないました。

学生たちは国籍に関係なく、チームに分けられ、各チーム担当のスーパーバイザーと共に、学会運営に必要となる様々な業務(学会看板やバナーの

設置、会場の設営、学会資料・参加者名札等の準備、学会会場への誘導案内、受付、各会議室へのIT機材の設置、稼働テスト、学会会場の準備、セッション・マネジメント、コーヒーブレイク会場の準備、最寄り駅やホテルと学会会場間の送迎バスの運営、レセプション会場への誘導などなど)に従事しました。学会が長丁場のため、各チームはシフト制で業務をこなしました。



学会開催3日前におこなわれた全体打ち合わせ会議の様子

グローバルなプロジェクト・ベースト・ラーニングの実践でした。多様な価値観や判断基準をもつチームメンバーがコミュニケーションによりwin-winの関係を築けるようになるかの見せ所です。日頃LAとしてアクティブ・ラーニングを実践し、培ってきた本学の学生たちの見せ場になりました。

学生たちはみな学会の会場となったキャンパス内のゲストハウスに宿泊していたので、昼夜を問わず親交を深めることができました。学生たちの部屋からは毎晩、笑い声と楽しく会話をしている声が聞こえてきました。よく聴いてみるとそれぞれの学生が英語だけに頼ることなく、スマホの翻訳機能を使い、英語、中国語、日本語などの様々な言語を用いて意思疎通をおこなっていました。

すばらしいグローバルな学びの瞬間を垣間見ることができました。

(教育推進部 山本敏幸)



開会式



受付業務

教育開発支援センターからのお知らせ

コラボレーションコモンズ“Lincom”でラーニングcaféを開催しています！



ラーニングcaféの様子

の参加もあります。講座では、グループワークを取り入れたり、お菓子を用意したりしており、和やかな雰囲気で気軽に学べることを特徴としています。

各講座を担当しているのはCTLの教員や研究員です。佐々木知彦研究員は速読、読書ノートの作り方、クリティカル・リーディングなど、本を読むコツをテーマにしています。特に速読の回は参加者が多く、人気がある講座です。授業で速読に時間をかけることは難しいですが、学生のニーズは高いため需要が高いと考えられます。岩崎千晶助教はスピーチの方法、スライド作成などプレゼンテーションのコツをテーマとしております。iPadを活用して自分のスピーチを撮影し、その動画をみて、自分の改善点を探す取り組みは好評です。この他にもライティングラボのTA(大学院生)や、授業でLA(ラーニング・アシスタント)を務める学部生も「英語でのライティング基礎講座」、「グループワークに参加する方法を学ぶ」講座などを担当しており、講座を活気づけています。

今後も受講者アンケートを基にラーニングCaféをさらに改善し、より良い学習支援に取り組んでいきたいと思います。先生方、ぜひ学生さんに紹介してください。

(教育開発支援センター研究員 佐々木知彦／教育推進部 岩崎千晶)

ライティングラボ活用のご案内

関西大学には、日本でも有数のライティングセンター「ライティングラボ」(以下ラボ)があります。千里山キャンパス第1学舎1号館5階、高槻キャンパスC棟1階学生サービスステーション内で学部生の文章作成に関する相談を受け付けています。来年度には、総合図書館内ラーニング・コモンズにもライティング・エリアが開設される予定です。

ラボでは、レポート、ゼミ等での発表資料、卒業論文などさまざまな文章作成を支援しています。支援方針は、「気づきを促す」ことです。大学院生のTAが学生に質問を投げかけ、答えを教えるのではなく、学生自身から答えを引き出すように心がけています。学生が自分で「考える」ようにすることがラボでの支援のポイントです。

現在、ラボは授業・ゼミとの連携を積極的に進めています。例えば、授業時間内におけるラボの見学や利用ガイダンス、教室に出向いての出張ガイダンス、出張講座などを行ってきました。さらに、先生方が受講生にラボの利用を指示する際に、ラボもその課題内容を共有させていただくという連携方法を提案し、より効果的な支援を実施しています。学生によって抱えている課題やつまずいているところが異なるため、こうした個々の状況に応じたアドバイスは、利用した学生さんはもちろん、先生方からも好評をいただいております。

授業・ゼミとラボとの連携にご関心がありましたら、ぜひ wlabo@ml.kandai.jpまでご連絡ください。先生方の授業にあった連携方法をご相談させていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。



ライティングラボ(千里山)での個人相談の様子

(教育推進部 西浦真喜子)

本学の取組が大学教育再生加速プログラム(AP)に採択されました

平成21年度に『三者協働型アクティブ・ラーニングの展開』が大学教育・学生支援推進事業〔テーマA〕大学教育推進プログラム(GP)に採択されましたが、このたび、この取組を加速させることをねらいとした『21世紀を生き抜く考動人〈Lifelong Active Learner〉の育成』が大学教育再生加速プログラム(AP)に採択されました。この取組は本学においてこれまでに展開してきた大学教育改革・再生に関わる事業を『アクティブ・ラーニング』を共通の理念・基盤として加速させ、学生を生涯に亘る能動的な学修者として育成するプログラムです。APはテーマIにアクティブ・ラーニングを、テーマIIに学修成果の可視化を、テーマIIIに高大連携を掲げていますが、本学はテーマIとIIの複合型APを展開することになります。以下にその概要について記します。

◆豊かで確かな社会人基礎力を身につける『考動モデル』の開発

大学には各界より人材養成に関する期待が寄せられ、教育内容の刷新と充実が要請されています。これに応えるために、大学は自らが有する「知」をベースとしたコンテンツを開発していますが、これに加え、「特定の課題に取り組むチームワーク体験」「実社会とのつながりを体感できる教育」等、教育の内容と方法をさらに工夫する必要があります。また学部の専門教育と卒業後の職業生活との間に強い連関性があるとは限らないと指摘する声のあるなかで、最近になって求められるようになった汎用的技能や高次思考力、批判的思考力の涵養にも十分留意する必要があります。

教育方法の改善とアクティブ・ラーニングの展開を目指したGPでは、主として初年次教育においてPBL型授業科目を中心に協同学習や課題発見学習を展開しながら、チームワーク・コミュニケーション能力・課題発見力などのアカデミックスキルの習得を促進してきました(後に『学問モデル』と命名)。これは関西大学が学士課程教育において修得すべきとする「考動力」の重要な要素であり、社会人基礎力の基盤となるものもあります。また、本学のキャリア教育は、自

己認識(Self Awareness)や自己変革の機会認識(Opportunity Awareness)など、キャリア管理力の基礎を修得するコンテンツを提供しています。しかしながら実社会で必要とされるより高次のコミュニケーション能力や創造的思考力の育成、あるいは能動的な社会人の育成に向けての意思決定学習(Decision Learning)や環境適応学習(Transition Learning)の機会が十分であるとはいません。

そこで上位年次の学生にゼミナール以外にもアクティブ・ラーニングの機会を提供し、学生が初年次における『学問モデル』を通して培ったものを基盤に、以後も継続的に省察的学習者・メタ認知のできる学習者として成長しながら、確かに豊かな「考動力」を身につけ、それを大学卒業後にもプラッシュアップし続ける姿勢(ハビトゥス)を培うプログラム(『考動モデル』)を開発します。

◆『考動モデル』のコアと拡がり

先に述べた『学問モデル』では「問い合わせを学ぶこと、すなわち「問い合わせ」の構造と意味を知り、統合して自ら問い合わせを探し、創ること(具体的にはStudent-centered Problem Based Learning)がコアとなっています。今回の『考動モデル』では獲得した知とスキルを実践的に活用しながら、省察を重ねて新たな問い合わせを見出し、その問い合わせを解くための批判的・創造的思考力を培い、より高度な実践力へと結びつけていくこと(具体的には「交渉」「批判的思考」の体験を通して高次のコミュニケーション力・合理的な思考力・的確な判断力ならびに構想力を体験・獲得するPBL・TBL型授業)をコアとしています。このような諸能力・姿勢・スキルの獲得には当該コンテンツの提供のみならず、双方向的・創造的な学習環境、すなわちアクティブ・ラーニング環境の整備が不可欠です。「交渉学(正確にはハーバード流交渉学)」は現在、複数クラスが開講されているほか、それ以外の複数の科目において授業の複数回をこの学問のエッセンスのインストラクションあるいは実践的ワークに充てるマイクロインサーションを実施しています。この「交渉学」を、

初年次向けに開講されているスタディスキルゼミに入門編として複数クラスを、さらに二年次以降の学生を対象とした共通教養ゼミに同じく複数クラスを上級編として開講します。上級クラスで学ぶことを通じて、創造的な交渉力を携えたリーダーを育成します。

既に関西大学では社会人と学生による交渉学ワークショップを複数回開催しています。社会人と学生がチームを組み、共通の課題に対して意思疎通を図りながら情報の不足充足を判断して収集の充実を図り、意思決定をする体験を通して、学生は実社会とのつながりを体感しています。このワークショップに参加した学生は確実に社会人基礎力を向上させ、学部のゼミナールあるいはLAとしてリーダーシップを発揮しています。今後はワークショップの開催頻度と規模を増し、「交渉学」を通して獲得した知とスキルを正課授業科目で得た学生の諸知見に対して活用することを図り、「考動力」育成の実質化を目指します。

◆『考動力』の評価と検証

本学で育成している各種のジェネリックスキルを構成する複数のコンピテンシーを同定します。そのために入学前教育から卒業・終了後の長期にわたって活用できるコモンループリックを作成します。このコモンループリックの大きな特徴は、社会人基礎力や学士力といったこれまでの教育的指標に加えて、DeSeCoの3つのキーコンピテンシーさらには21世紀スキルという未来型指標も参照することになります。本学が目指す「考動力」が国際通用性を持ち、予測不可能なこれから社会に複眼的な視野を持って「知」の世纪をリードするという希望と可能性を実現するために、このような評価に基づいた絶えざる省察が不可欠だと考えるからです。

考動力モデルの開発と評価・検証を通して、本学におけるアクティブ・ラーニングがより確かなものとして展開を加速させ、さらにその取組が他大学においても継承・発展させされることによって我が国の高等教育の質的な向上に貢献できることを望んでいます。

(教育推進部／教育開発支援副センター長 三浦真琴)

**From
CTL事務局**

12月から、平成27年度春学期授業支援SAの新規募集が始まっています。

本学で運用している

授業支援SA制度とは、本学学生スタッフ(ステューデントアシスタント=SA)が、授業の教育効果を高めるために、授業担当者が行わなければならない軽微な業務や、授業担当者単独では負担になる業務について補助を行うものである。

SAの具体的な業務内容は、授業で使用するパソコン・プロジェクターの設置・回収やカードリーダーによる出欠調査、ミニツッペーパー(コメント用紙)の印刷・整理・データ入力などの、授業をサポートする業務に加え、教員や学生からの質問対応や拾得物対応など非常に多岐にわたる。特に授業支援ステーションでの窓口対応では、教員や学生からの依頼や質問などを伺った際に、その内

容をしっかりと自分の頭の中で理解した上で、事務的な手続きや職員への伝達等を行わなければならない。このため、SAはコミュニケーション能力を有していることが非常に重要であり、採用の選考基準として最も重視している。

選考は、書類審査と面接で行う。面接では、冒頭面接官が簡単な質問をしたり、被面接者からの自己アピールなどを行った後、面接官から出されるテーマについてグループディスカッションを行う。面接を始める前に、「面接ではできる限り発言してください。我々はみなさんの良いところを見たいと思っています。発言がないと我々も採点のしようがないので、積極的に発言してください」と伝えているものの、中にはグループディスカッションでほとんど発言しない学生もあり、見ているこちらが「頑張れ」という気持ちになる。

これまで多くの学生を面接で見てきたが、被面

接者は本学の学生であり、どうしても「何とかしてあげたい」という気持ちで見てしまう。それでも採用予定人員は決まっているため、スコアの低い者は不採用となってしまう。不採用を決める際に「次回も受けてくれるかな?」などと考え、自責の念にかられながら通知を発送している。

さて今年はどのような学生が面接を受けにきてくれるのか。面接は2月の予定である。

最後に、話は変わるが関西大学体育会野球部が、平成26年度関西学生野球連盟秋季リーグ戦にて19年ぶりに優勝、その後の関西地区第1代表決定戦にも勝利し、明治神宮野球大会に出場した。惜しくも創価大に敗れ全国優勝はならなかったものの、来年も期待できるのではないだろうか。関大生が活躍している姿を見るのは、一卒業生として大変喜ばしいことである。頑張れ! 関大生!!

(裕)



**KANSAI
UNIVERSITY**

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514
<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

発行日／2014年12月19日 編集・発行／関西大学 教育開発支援センター